

## 「心を合わせて祈る」

2016年02月08日

**使徒言行録1章12節～14節。**使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。

主イエスが天に昇られたのは「オリーブ畑」と言われた所であった。ここは、主イエスの宣教団が、オリーブ畑の持ち主から使用することを許されていた秘密の野営地であった。使徒たちは、主イエスを天に送り、エルサレムに戻って来た。オリーブ畑からエルサレムまでは、安息日に歩くことが許されていた900メートルほどの距離であった。彼らはエルサレムに入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。「上の部屋」とは、過越の食事をした部屋である。使徒言行録12章には、ペトロは投獄されたが、天使に導かれ、出獄できた事件が記されている。ペトロは、神が天使を遣わし助けてくれたことを知り、喜ぶ。出獄後、ペトロは「マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った」と書かれている。「上の部屋」はマルコ・ヨハネの母マリアの家であろう。ここは、主イエスのために、その後の教会のために用いられた重要な家となっている。

集まったのは、裏切ったイスカリオテのユダを除く11使徒たち、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。「熱心党の」シモンと訳されているが、ギリシア語の原文は「ゼーローテース」で「熱心者」である。熱心党は「ゼーロータイ」である。使徒言行録の著者は政治問題に敏感で、ローマにとって危険な「ゼーロータイ」という言葉を用いず、「ゼーローテース」と書いたものと思われる。従って、「神と律法に熱心な」シモンとなる。

群れには当然、女性たちもいた。名前を上げているのは「イエスの母マリア」だけであるが、主イエスが埋葬された墓に急いだマグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリアなどがいたことは確かであろう。彼女たちは、ガリラヤから宣教団に加わり、奉仕活動を続けた。宣教団は彼女たちの奉仕に支えられていたに違いない。当時、女性たちは家に縛られ、勝手に旅行することは許されていなかった。律法破りの彼女たちの存在は、主イエスに対するファリサイ派の人々の攻撃材料にもなっていた。また、主イエスの復活証言は彼女たちから始まっている。当時の裁判では、女性には証言能力が認められていなかった。キリスト教は、証言能力がなかった女性たちから始まっている。主イエスの福音は時代の価値観をひっくり返すことであった。

また、群れに主イエスの兄弟たちも加わっていた。主イエスの兄弟はヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンである。彼らは、兄イエスが激しい宣教活動をし、時の宗教者たちに命を狙われていると聞いて、故郷ナザレに帰ろうと諭しに来たことがあった。復活した主イエスを見た兄弟たちは群れに加わっている。ヤコブは後に、ペトロと共にエルサレム原始教会の重鎮に成長している。群れの人々は熱心に祈っていた。聖霊降臨を待つて祈っていたのであろう。待つことは忍耐がいる。その忍耐を祈りが支えた。